

# 外城遺跡 —第2・3次調査のあらまし—

外城遺跡は、石岡市貝地一丁目5189番ほかに所在する遺跡です。鎌倉時代から戦国時代の城館(石岡城、外城)で、現地には今でも堀や土塁が残っています。

また、奈良・平安時代の土器や瓦も散布し、国分寺以前にさかのぼる軒丸瓦も採集されています。「フンダテ(古館)」「カンドリ」という地名も残ることから、古代常陸国の茨城郡の役所(郡家、郡衙)に推定されています。

これまでは昭和60年度に部分的な発掘調査が行われただけでした(第1次、A・B・C地区)。市教育委員会では遺跡の範囲や内容を確認する調査を開始し、平成30年度は微地形測量と地中レーダー探査を行いました(第2次)。令和元年度は微地形測量と探査を継続するとともに、第2次調査の成果をもとに発掘調査を行いました(第3次、D地区)。

第2・3次調査では、以下のような成果をあげることができました。

## ○堀跡の発見

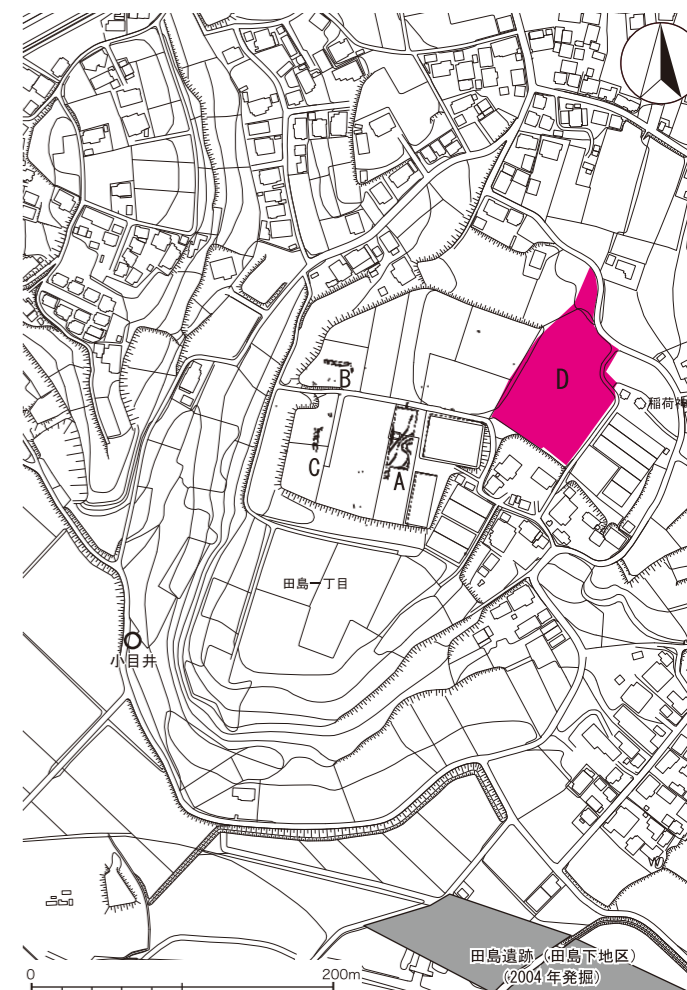
発掘調査を実施したD地区は、ほぼ平坦な状態でした。しかし、細かな地形を測量したところ、北側で東西方向の帯状に低くなっている箇所がありました。探査でも反応があることから、堀跡の存在が推定されました。

そこで、その箇所に調査区(トレンチ)を設定したところ、幅約10mの堀跡を発見しました。また、部分的な掘り下げを行ったところ、南側から粘土を含んだ土砂が大量に流れ込んでいることから、堀の南側には土塁が存在していたことがわかりました。

発見された堀と推定される土塁は、現在も残る堀・土塁と連続し、「曲輪」を形成していたことがわかります。

## ○中世の遺構を確認

堀跡を発見した南側の調査区では、中世と考えられる遺構が重複して存在していました。第1次調査のA地区も同様で、中世に積極的に利用されていたことがわかります。



◀全景(北西から)  
人が立っているのが堀跡の端の部分。左奥の現在も残る堀・土塁へと続く。



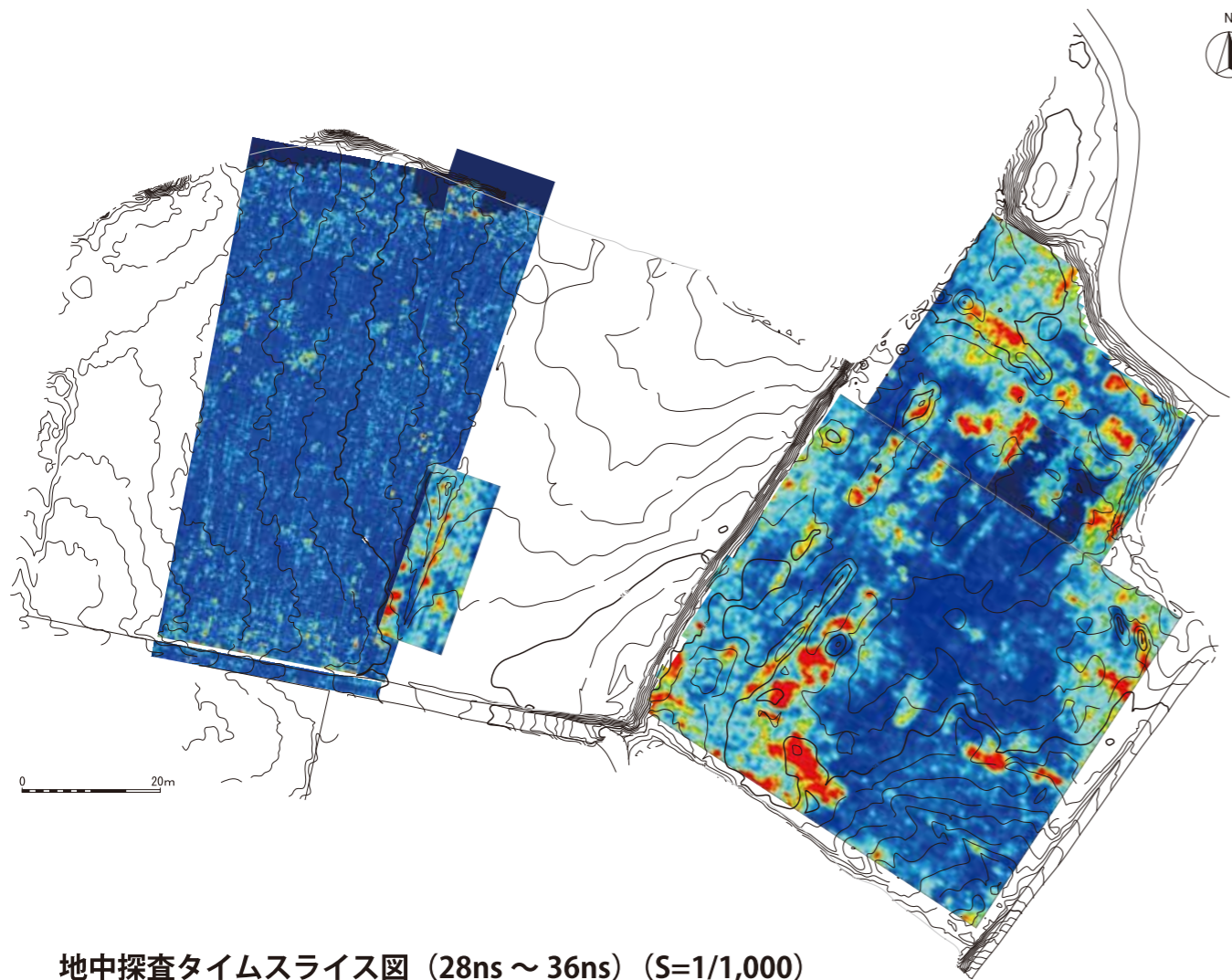
▲D-4T 堀 SD0301 (北西から)  
右側(南側)から粘土を含む土砂が大量に流れ込んでいる。南側には土塁が存在しており、土塁の土砂によって埋め戻されていたのがわかる。



D-5T (北から)▶  
中世の遺構が多数重複して存在している。



測量図 (S=1/1,000)



地中探査タイムスライス図 (28ns ~ 36ns) (S=1/1,000)



発掘調査全体図 (S=1/500)